

校長室だより～和光高校今昔 第17号 H26.8.29

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

陸上部の歴史

今年度に入り陸上部の活躍が目覚ましい。投てきで2年生が男女それぞれ県大会に進み、リレーでも着実に記録を伸ばしている。特に2年生の寒河江翼は円盤投げであとわずかで関東を狙えるところまで来ている。この夏に鍛えれば、新人戦での上位入賞が期待される。現顧問の畦田恒洋は高校・大学と第一線の長距離ランナー、持ち前の粘りとひたむきさで信頼・人望も厚い。夢のインターハイ・都大路出場まで突っ走ってほしい。



さて、和光陸上部だが創立の年、1972年に創部されている。体育館もない時代だったので、施設不要の陸上部がすぐにできたのは必然だろう。校庭内外の整備が練習時間のほとんどを占めていたことは容易に想像できる。20周年記念誌では、開校2年目に赴任された堀江治男先生と石堂則子先生が顧問をされていた1980年代を第I期黄金時代としている。

ちなみに石堂先生は本校1期生でもある。もちろん陸上部に所属し3年生では校内マラソン大会優勝を果たしている。教師をめざし大学に進学し、主に中距離ランナーとして活躍した後、1979年に母校に体育教師として戻ってきたのだ。堀江先生は高校時代の石堂先生の恩師にも当たる。謹厳実直で誠実なお人柄と「早起き・あいさつ・清掃」のエピソードには事欠かない。マラソン大



会には毎年参加し、常に上位で完走なさっている（2～30位と敢えて生徒の順位に関わらないようにされている）。この実力を知らなかった私は初任の年のマラソン大会で、当時40歳近い堀江先生に途中で追い抜かれたことがショックで、その後はペースを乱し散々な結果であったことを記憶している。

この時期陸上部は「マラソン大会部」などと冗談交じりに揶揄されたこともあったが（今思えば石堂先生御自身の経験に基く素晴らしい指導であったが…）、本業のトラックやフィールドでも当時春日部高校など全国トップクラスが集うハイレベルの1600mリレーなどに挑み、82年の3分26秒4の記録（川村・小島・杉山・磯島）などは特筆されるべきであろう。彼らに加え、杉本、横田、門田、福田、藤門などが県大会で活躍したがそれよりも上位の大会には進むことができなかった。

記念誌によると、平成に入ってから奈良浩道・岡本輝両顧問の指導により第Ⅱ期黄金時代を迎える。奈良は高校・大学時代に埼玉の短距離、投てき、10種競技などを制する万能選手として名を馳せ、今の桐生や土井に匹敵するオリンピックを期待させるようなスーパースターであった。天才肌の奈良と理論派の岡本とのコンビは絶妙で、主に中距離、ハードル、円盤投げなどで選手たちは躍動した。今以上に練習環境に恵まれない当時の和光高校にとってこれらの活躍は本当に素晴らしいことだが、前述した現在の活躍種目と符合するところは興味深い。

その後、幾度かの廃部の危機を乗り越え、陸上専門の体育科教師としては久々に松浦直人教諭が着任する。2008年のことであった。松浦はすぐに部を立て直した。マイナスからのスタートは、ある意味開校当初より厳しいものであったが、真摯な指導は生徒に響き、昨年から畦田に引き継がれたのである。

和光陸上部悲願のインターハイ出場は無謀な挑戦かもしれない。しかし、ここにきての練習の濃度や取り組む生徒たちの姿勢から、自分たちで土を入れ、一生懸命均した手作りのトラック（昔のテニスコート）から近いうちに40年来の夢が実現すると確信している。努力は決して裏切らない。

